一句忽爾題に歸し人をして覺えさらしむ住

たゞにか利に走りつゝ心をなやまず。人の身のうへは、やがてわが身の上と思へば、よそに見すぎゆくにえ忍びず。傍への土深く埋めて、ねもごろに回向すらく、そもそも、汝は何處の人のはてにして、いかなる業因によりて、今ハろくあさましき姿となりけるぞや。われのれ汝と深きえにしこそあらぬ。情にしのびざる所のあれば、吊ひつるなり。汝速に土となりて、草をこやしもて、佛果を結べよ。と念じれべて、さて、勸善懲惡のよかたりにもしつるまゝを。いさゝか書きしるゑつるになむ。

稼堂陳人評

秋季修學旅行軍歌

黑本植

（一）

頃は霜月秋のくれ　晴れゆく峰のもみぢ葉を　いつか身に着る錦ぞと
思ひたつたの山風に　あさぢの露を掃はせて　進めや進めすゝむ身の
覺えは德の基なり　覺えハ德の基なり

（二）

岩根松がね踏みならし　鷄なく月の宿出でゝ　人情風俗地理歷史
金石草木とり〳〵の　學理の鏡に照せつゝ　磨けやみがけみがく身の
智識ハ御世の光なり　智識は御世の光なり

（三）

旅より旅のなれ衣　身に沁む霜を重ねつゝ　銃を枕に見はなせば
南ハ臺灣北は露西亞　青山萬水目に滿てり　鍛へや鍛へきたふ身の
武勇は國の護なり　武勇は國の護なり